日本の難聴者におけるストレスと精神的健康の実態^{1 2}

難聴・難聴者への理解を深めるために

勝谷 紀子

(青山学院大学)

キーワード: 難聴, ストレス, 精神的健康

Stress and mental health of hearing-impaired people in Japan

Noriko KATSUYA

(Aoyama Gakuin University)

Key Words: hearing impairment, stress, and mental health

目 的

「全聾の作曲家」佐村河内守氏の作品がゴーストライターによるものだったことが発覚した。また、佐村河内氏は全聾ではなく、身体障害者手帳の取得に至らないレベルの感音性難聴であることも検査によって判明し、身体障害者手帳を返還する事態となった。これら一連の事態の報道には、身体障害者手帳の取得に至らない難聴者は聴覚障害ではないかのような誤った内容、聾ではない難聴者は日常生活では支障がないかのような誤解を与えかねない内容も含まれていた。

よって、日本における難聴や難聴者への誤解や偏見をなくするために難聴者の実態を明らかにし、難聴や難聴者に関する知識を専門家だけでなく誰でも知っている常識にするための対策を考える必要がある。そこで本研究では、難聴者を対象に調査を行い、ストレスと精神的健康の実態を調べた。

方 法

調査対象者 一般社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会(全難聴)の加盟協会に所属する難聴者 453 名(男性 139 名, 女性 312 名, 不明 2 名, 平均年齢 65.22 歳)。

調査手続き 加盟協会に対して会員への調査票の配布を依頼した。各会員には、回答済みの調査票を郵送で返送するように求めた(協力の了承を得た回答者に第 2 回調査を実施したが、ここでは報告しない)。

調査票の構成 調査票の質問は、大きく分けて基本的属性、聞こえの状態、精神的健康、身体的健康に関わる質問からなっていた。本報告では、精神的健康に関わる項目を報告する。

精神的健康の指標 CES-D(島・鹿野・北村・浅井, 1985)によって抑うつを調べた。また、難聴者への聞き取り調査にもとづき作成した難聴にまつわるストレスイベント尺度によってストレスイベントの経験の有無と経験した場合の辛さ((1)全く辛くなかった-(5)非常に辛かった, の 5 段階, 35 項目)を尋ねた。数値データの分析には R3.1.0 を用いた。

結 果

聞こえの状態について 回答者のうち、聴覚障害による身体障害者手帳を持っている者は 389 名, その他の障害によって手帳を持つ者が 9 名, 身体障害者手帳を持っていない者は 48 名(無回答 7 名)だった。難聴のタイプについては、感音性難聴が 307 名, 伝音性難聴が 19 名, これら両方の混合型が 85 名, 不明が 28 名, その他が 14 名だった(複数回答)。

精神的健康の指標の傾向 CES-D の合計得点の平均値は 14.14 ($SD=8.32$) だった。難聴にまつわるストレスイベント尺度の回答については、「経験した」と回答した割合が多かった項目は、日常生活の様々な場面に関わるものだった(表 1)。

身体障害者手帳の有無による比較 精神的健康の指標について、身体障害者手帳の有無や手帳の等級によって違いがあるかを検討した。まず、CES-D の合計得点を比較したところ、聴覚障害による身体障害者手帳を持っている回答者($M=14.13$)と身体障害者手帳を持っていない回答者($M=13.70$)とで差がみられなかった($t(38.25)=2.68$, $n.s.$)。

また、難聴にまつわるストレスイベント尺度について、「経

験した」と回答した項目の数を比較したところ、聴覚障害による身体障害者手帳を持っている回答者($M=28.07$)は持っていない回答者($M=25.15$)より数が多かった($t(59.26)=2.575$, $p<.05$)。辛さの評定値の合計点については、聴覚障害による身体障害者手帳を持っている回答者($M=108.99$)が持っていない回答者($M=90.33$)よりも有意に高く評定していた($t(57.92)=2.83$, $p<.01$)が、等級による差はみられなかった。

表 1 経験率の多かったストレスイベント尺度の項目

番号	項目	経験率
7	声の小さな人や早口の人話が聞き取りにくかった(もしくは、聞こえなかった)	95.50
18	テレビやラジオの音声が聞きとりにくかった	94.48
8	遠くから話しかけられて聞き取りにくかった(もしくは、聞こえなかった)	93.05
19	駅、建物内(デパートやイベント会場など)の放送が聞きとりにくかった(もしくは、聞こえなかった)	92.97
27	マスクをかけた人の声が聞きとりにくかった	92.95
20	電車やバスなど乗り物内の放送が聞きとりにくかった(もしくは、聞こえなかった)	92.79
21	マイクやスピーカー越しの音声がわかりにくかった(もしくは、わからなかった)	92.78
9	周囲が静かでない場所での会話が聞き取りにくかった	92.74
4	受付、窓口、レジでの会話が聞き取りにくかった(もしくは、聞こえなかった)	92.12

注: 経験率が 90%を超えた項目のみを示している。

考 察

日本の難聴者におけるストレスと精神的健康の実態を調べた。今回の調査協力者は、聴覚障害関係の協会に所属している難聴者であった。自身の聞こえの問題についてある程度自覚あるいは受容をしており、何らかの対処をしようと取り組む動機づけが高い可能性が考えられる。聞こえの問題を自覚できない、あるいは明らかにせずに抱え込む難聴者もいると思われることから、今後は協会に所属をしていない難聴者も対象として比較、検討することが必要である。

引用文献

島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘(1985)新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学 27, 717-723.

¹ 調査実施, データ整理には山本真菜さん, 川久保美奈さん, 西村光一さんにご協力いただきました。また, 調査の実施には全難聴および加盟協会の皆様の支援を受けました。記してお礼を申し上げます。

² 本研究は JSPS 科研費 23730669 の助成を受けたものです。